論　文

都市的生活様式の限界と農村的生活様式の切り崩し：都市と農村の社会分析のために

山本　　努[1)]

要　約

都市と農村（村落）は現代社会の２つの地域社会であり，そこには２つの暮らし方（生活様式）がある．この都市的/農村（村落）的生活様式論は日本の社会学のオリジナリティを示す重要な研究課題である．都市的生活は専門機関に依存的な暮らしだが，それに依存しきっているわけにはいかない（都市的生活様式の限界）．農村（村落）的生活様式は自律的な暮らしであったが，過疎化，限界化の問題がある（農村的生活様式の切り崩し）．現代の巨大システム（都市的生活様式を可能にする，専門機関，つまり，商業サービス，行政サービス）に取り囲まれた暮らしが圧倒的になればなるほど，人々の暮らしに社会や地域が必要である．

Key words：都市的生活様式，農村（村落）的生活様式，限界集落，過疎

1．ソローキンにみる，都市と農村の違い

地域社会には都市と農村（村落）がある（本稿では農村と村落は互換的に用いる）．本稿の課題は，農村の中でも過疎地域とか限界集落と呼ばれる地域の現状を捉えることである．あわせて本稿は都市と農村の社会分析入門講義のためにも書かれている．したがってまず，都市と農村という言葉の意味をはっきりさせておく必要がある．

そこで，都市と農村の特質を適切に対等に対比，検討した定義が，ソローキンの都市と農村の定義である．ソローキンはアメリカの都市と農村を以下のように8項目にわたって対比した（ソローキン＆ツインマーマン，1940: 3-98）．

(1) 職業・・農村では農業，都市では非農業が中心．

(2) 環境・・農村では自然が優越．都市では人為的環境が優越．

(3) 人口量・・同一国家，同一時代においては，農村よりも都市で人口量が大．

(4) 人口密度・・同一国家，同一時代においては，農村よりも都市で人口密度が高い．

(5) 人口の同質性・異質性・・農村は同質性が高い．都市は異質性が高い（多種多様な人がいる）．

(6) 社会移動・・都市は農村よりも水平的，垂直的移動性が大．

(7) 社会分化・階層分化・・都市は農村よりも社会分化と階層分化が大．

(8) 社会的相互作用組織・・農村では第一次的接触が多い．都市では第二次的接触が優位．つまり，農村では知り合いのAさんがお百姓であり，別の知り合いのBさんが市役所の職員である．都市では，匿名で顧客と店員などのように人格の一面で相互作用する．

[1)] 神戸学院大学現代社会学部現代社会学科

2．奥井復太郎にみる，都市と農村の違い

前節ではソローキンによる，アメリカの都市，農村の8項目対比をみた．日本でこれに似た考察をしたのは奥井復太朗である．奥井（1940: 11-18）は（A）職業　（B）自然的物的環境　（C）人口量及び人口密度　（D）組織及び制度　（E）社会構成の5項目で都市，農村の対比を行っている．この奥井の対比は日本の都市と農村を対象にした点で重要である．

この内で奥井の（A）職業　（B）自然的物的環境　（C）人口量及び人口密度　（E）社会構成は（個々の項目の考察には光るものがあるのだが），ソローキンの（1）職業　（2）環境　（3）人口量（4）人口密度　（8）社会的相互作用組織と結論的にはほぼ同じ内容である．違うのは次の2点で，こちらが重要である．ここには日本の都市，農村の特徴が出てくるからである．

まず，奥井には，ソローキンの（5）人口の同質性・異質性　（6）社会移動の対比がない．この2項目は，アメリカの都市，農村の対比にこそ適切な項目であり，日本の都市と農村の対比を考える時，「その適用に多少の困難を感じる」項目なのである．アメリカの都市理論の特色は，「第一は非伝統的なる点であり，したがって第二に著しき可変性運動性であり，第三に雑異性の理論」であると考えるからである（奥井，1940: 71）．この可変性運動性は，ソローキンの（6）社会移動，雑異性は（5）人口の異質性に対応する．「シカゴ市！　これについてのあらゆる統計はそれが諸君の手に届く頃にはもう時代遅れになっている」といわれるくらいに[(1)]，アメリカでは都市の変貌（可変性運動性）が激しく，雑異性（異質性）が大きかったのである[(2)]．

これに対して，奥井が強調したのは（D）組織及び制度の項目である．この項目は，ソローキンの（7）社会分化・階層分化と近いが，奥井の独創が大きく，非常に重要である．奥井は次ぎのようにいう．重要なので，やや長いが，引用する．

「組織及び制度による特質：社会は集団的生活である故に，常に何等かの組織と制度とを持つ．多数の人々が一緒に生活している為に，（イ）全体の為に個人を規律する組織や制度が必要になると共に，（ロ）個々の人々が処理するよりも，全体を包含して特定の機関に処理せしむる方が便利の場合があり，其処に再び組織が生まれて来る．例をもって云えば交通統制の如きは巨大なる人口集団の社会にもっとも必要な事であって，人口集団が小さい場合はその必要を見ない．之れと同様な取締規則が田舎に比して都会に多い．さらに田舎では各自が銘々井戸を掘って飲用水を用意するが都会では水道経営者に委せて飲用水の供給を得る．宴会の如きも田舎では自宅で自家の手で行うに対して都会では料理屋でやる．又は自宅で行うにしても料理屋を出張せしめてやる．このように多勢の人々が一緒に生活していると，色々の組織や制度が出来てくる．・・・かくの如き組織や制度の反面は，分業という事実に外ならない」（奥井，1940: 16-17）[(3)]．

ここから都市と農村の2つの対比が示さる．ひとつは分業ということだが，たとえば，家事，育児，教育，医療衛生，治安，消防，ゴミ・汚物処理，救護救恤・・・等々が都市では専門の機関（組織や制度）に委ねられる．これらは農村では家族のなかで行わることである（奥井，1940: 483）．ここから，都市は生活上の営みを（極端に云えば）悉く委託できる専門的な組織や制度を生み，それに依存した生活を生む．勿論，この依存には多くの場合，金銭が必要である．したがって，都市生活は貨幣的でもあり，「ドウです儲かりますか」というのは，都市での挨拶代わりにもなる（奥井，1940: 492-506）．

さらには，もう1つ重要なのは，「取締規則」が都市に多いという点である．都市ではフォーマルな統制が必要になってくるので，法律規則が多いのである．法律規則のへの対応は，個人的に

対処，善処したりすること（つまり，個人的裁量）を許さない．「敏捷の故をもって，赤信号を無視して自動車・電車の間を走り抜けたりする事」はできないのである．これに対して，農村にも慣習等はあるが，個人的に対処，善処して（個人的な裁量をして）差し支えない場合が少なくない（奥井，1940: 505-506）．これについては，きだみのるの面白い農村記録がある．たとえば，山仕事を始めるのに山の神様にお酒をさしあげる習慣だが，「酒の代わりに「神の酒」なる石清水が入っていたかもしれない．英雄（山本補注：村人のこと）たちは酒が好きだ．途中で神さまの目を盗んだということもありえよう」（きだ，1981: 97）[(4)]．

3．都市的生活様式と農村（村落）的生活様式の違い：奥井復太郎と倉沢進の認識

奥井のアイデアをさらに明晰にしたのが倉沢進の都市的生活様式論である．倉沢が重視したのは奥井のいう都市における専門的な組織や制度，および，それへの依存主義の生活である．

倉沢によれば，村落と都市の生活様式上の差異は，「村落おける個人的自給自足性の高さ，逆にいえば都市における個人的自給自足性の低さ」である．これは奥井の都市の依存主義と同じである．また，同じく倉沢によれば，村落と都市の共同の様式に関わる差異は「非専門家ないし住民による相互扶助的な共通・共同問題の共同処理が村落における共同の原則であるとするならば，専門家・専門機関による共通・共同問題の専門的な共同処理が，都市における共同の原則的なあり方」とされる（倉沢，1987）．こちらは奥井が都市における専門的な組織や制度に着目した内容と同じである．

それは，奥井の次の文言にも明らかである．これも重要なので，引用しておく．「都市に於いては各種の動きが社会化されて，制度化される事実がある．農村では各戸に於いて各自，給水準備を行うに対して，都市に於いては水道経営となって現はれる．農村に於ける隣保匡救の仕事は，都市に於いて社会事業となる．斯くの如くして都市に於いては多くの働きが社会化され組織立てられ，制度化されて来る．又農村に於ける綜合的な多角的な働きは，都会に於いて単一専門化特殊化される．例えば，家事，育児，教育等々が都会に於いては，それぞれの専門の機関に委ねられて，各人の活動を単一，専門化するのに対して，農村に於いては，其れ等が家庭の綜合・多角的な営みの内に含まれている」（奥井，1940: 483）．

なお，倉沢には，奥井が注目した都市の「取締規則」への論及はない．倉沢は奥井に言及していないのでその理由は不明である．とはいえ，倉沢の都市（農村）的生活様式論は都市・農村の基底を探示す重要な認識だが，その先駆は奥井にあったのである．倉沢（1987: 299-300）は自らの都市的生活様式論の淵源をジンメル，パーク，ワース系のアーバニズム論への不満にあることを示している．この理路は，奥井も同じであるにも関わらず奥井への論及がない．倉沢が奥井の『現代大都市論』を読んでいなかったとは考えられず，まことに不思議なことである．

4．都市的生活様式の限界：倉沢進の問題提起の重要性

さて，奥井にしろ，倉沢にしろ，都市的生活様式とは，多くの生活領域で専門機関，つまり，商業サービス・行政サービスが成立し，それらの専門的処理に依存する生活のことである．これに対して，農村的生活様式とは，自家・自律的処理と住民（非専門家・素人）の相互扶助からできている生活のことである．

ただし，倉沢が都市的生活様式論で提起した問題意識は，専門機関では対処できない多くの課

題があるということである．この指摘は倉沢の独創で重要である．倉沢は次のようにいう．「古典的コミュニティの解体とは，素人の住民の相互扶助による問題の共同処理のシステムが専門機関によるそれに置きかえられた結果であったが，生活の社会化の新しい局面は，商業サービス・行政サービスなど専門的処理のみでは処理しきれない問題の多いことを示した．都市社会のなかに新しい相互扶助的・自律的な問題処理システムが必要だということであった．コミュニティ形成における住民運動の意義に，非常な期待がかけられたのも，このためであった」（倉沢，1976: 50）．

この問題提起が重要なことは，商業サービスや行政サービスに頼り切った生活で，すべてが問題なく，順調に進むかどうかを考えてみれば分かる．

たとえば，電気の供給は電気料金を払って，あとは電力会社にすべて任せておけばいいのだろうか？　人々の安心・安全は警備会社や警察にすべて任せておけばいいのだろうか？　医療や教育や福祉は病院や学校や福祉サービス機関にすべて任せておけばいいのだろうか？　必要な情報の入手は，新聞やテレビやインターネットにすべて任せておけばいいのだろうか？　そして，究極的には，われわれの様々な生活ニーズの充足は，国（行政）や企業にすべて任せて（依存して）おけばいいのだろうか？

この答えが「否」であるのは，明らかである．ここには，都市的生活様式の限界がある．都市的生活様式においては，お金を払えば，快適なサービスを受けられることも多いのは事実ではある．ただし，お金を払えない人には，このサービスは使えない．また，快適なサービスが労働現場の著しい低賃金や非人間的な労働によって担われている場合もある（エーレンライヒ，2006；ブラッドワース，2019）．さらにはお金が払えてもそれですべて解決というわけではない．

このことは，原発の安全神話を信じて，原発に依存した暮らしが，福島の原発事故の2011年3月11日以降，破綻したことを想起しても明らかである．ここで，原発の有用性や安全神話を流布した莫大な「原発広告」もあることも重要である．それによって，原発に安心して依存する人々が作られた．広告会社は専門機関（商業サービス・行政サービス）に依存する生活を受け入れる（好む）人々を作る，専門機関というべきなのである．本間（2016；2013）はそれを「洗脳」，「国民扇動プロパガンダ」とよぶ．実際，原発を受け入れる人は，福島の原発事故以後でも随分多いのは，山本（2019a），山本・福本（2022）で示した．人びとのこのような意識は都市的生活様式の中で社会的，意図的に作られてきたのである．

5．都市的生活様式論の日本的展開

前節でみたように都市的生活様式には種々の限界がある．つまり，「生活や社会」versus「専門機関（商業的，行政的サービス機関）」というべき問題が都市的生活様式論の重要な問題提起である．今日，この問題は，さらに重要になっている．たとえば，電力会社（原発）と生活，病院（医療）と患者（生活），行政（合併や行政サービス）と住民，ネットと個人，マスコミと人間などの論点がそれである．

専門機関依存型の都市的生活様式は，依存的，従属的な暮らしを作る．しかし，依存して，「お任せ」していることはできない多くの問題があり，それをリスクと呼ぶなら，そのリスクを補完し，そのリスクに対抗，対処する人々の動き（共同的営為）は非常に重要である．そこで専門機関による問題処理システムのなかに素人の住民の相互扶助のサブシステム（≒農村的生活様式）をいかに組み込むかという課題が指摘されるのである（倉沢，1976）．

このような問題提起は都市的生活様式論の日本的展開で重要である．欧米の都市的様式論には，何故か，この「生活や社会」versus「専門機関（商業的，行政的サービス機関）」という問題構図がない．欧米（特にアメリカ）の都市的生活様式論を検討した倉田（1978）によれば，「都市的生活様式の特質は，①多様性（異質性）　②非人格的関係　③匿名性　④　流動性　であることが普遍的に承認されている」．この結論は，本稿の先に見たソローキンの都市における，(5) 人口の異質性，(8) 社会的相互作用組織第二次的接触が優位，(6) 社会移動　にほぼ対応する．

日本の都市的生活様式論（専門機関依存性）は，ソローキンの (7) の社会分化の指摘との関連が強い．社会分化とは専門機関を作ることと等しいからである．これが，日本では「生活や社会」versus「専門機関」の問題になって出てきている．これに対して，アメリカでは，社会分化の議論は異質性，匿名性，階層性への議論に近づいている．

6．農村における都市的生活様式の浸透，過疎や限界集落という言葉の登場

さてこのように現代の都市でも農村的生活様式は重要であるが，農村の暮らしも大きく都市化しているのも事実である．1950年代後半からのすさまじい高度経済成長にともない農村の生活が大きく変わったのである．ここにみられるのは，農村における都市的生活様式の浸透（つまり，農村の都市化）である．この都市的生活様式の浸透が，旧来の農村生活の基盤を切り崩していったのが，過疎問題である．

この過疎を高度経済成長が終了しても問題にしたのが，大野晃の限界集落論である．高度成長の終わりとともに過疎は終わると思われたが，終わらず深化したのである（山本，2019b: 51-53）．

限界集落論は高知のもっとも条件が不利な山村の調査から，過疎の極北を示したところに意義がある．これはちょうど，アメリカ都市社会学がシカゴという極端から都市を描いたのと似ている．シカゴ学派都市社会学の命題がいろいろな反論にさらされたように，限界集落論もいろいろな反論にさらされた．しかし，これは限界集落という過疎の極北を描いた研究のインパクトの強さというべきである．では，限界集落論とは，どのような主張だろうか？

まず限界集落論は現代山村を対象にした議論である．山村とは「地域の多くが森林で覆われ，山地（やまち）農業と林業によって生活の基盤が支えられている人びとが，その生産と生活を通して相互に取り結んでいる社会」であり，現代山村とは「戦後日本資本主義の展開過程で商品経済が山村生活の深部にまで浸透していった高度経済成長以降の山村」である（大野，2005: 7）．

この現代山村は戦後日本資本主義の展開から取り残されるというのが，大野の主張である．図1は大野の考える現代社会の危機の構造の全体像である．ここから，山村の問題の背後には農工間，地域間の不均等発展があり，さらにその背後には，アメリカと同盟関係にある戦後日本資本主義の展開がある．これが限界集落論の基本枠組みなのである．

7．限界集落論の現状分析

この基本枠組みを具体的な山村調査で用いた研究に，大野の高知県池川町調査がある．この論文（「現代山村の高齢化と限界集落」）は「総じて農林漁業の輸入依存政策が，国内の農村，山村，漁村の地域破壊につながることの問題性」を描いたものである（大野，2005: 81-99）．

この論文では池川町の森林組合が請け負った1987年の杉間伐材の売り上げ明細書が示される．これによれば，8トン車2台の杉間伐材の売り上げ代金が25万6325円で，経費合計23万4710円が

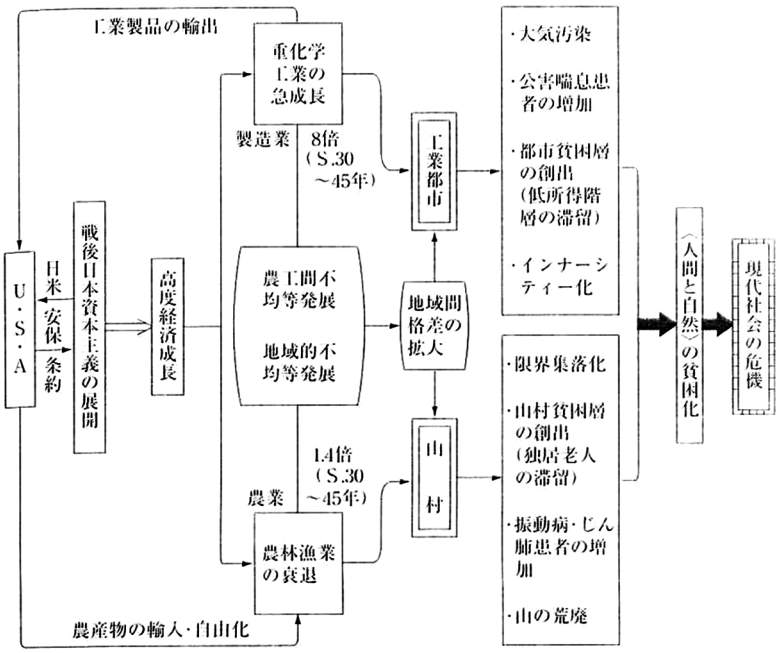

図1　現代社会の危機の構造
出典：大野晃（2005: 35）より．

引かれて，生産者の手取りは2万1615円である．つまり，8トン車1台で1万800円だが，20年前（1967年頃）は8トン車1台で10万円にはなったという．ここには，外材の圧迫による林業不振が端的に示されている．

さらには，集落の非常に厳しい状況も示される．論文に出てくるのは，人口減少の一番きびしいK集落である．高知の山村では現在でも土葬が主流なのだが，葬式もできず，墓掘もできず，棺桶もかつげないのである（大野，2005: 93）．老人の暮らしは，「子どもからの仕送りもなく，野菜を自給しながら現金支出をできるだけおさえた生活を余儀なくされて・・・集落全体が“ボーダーライン層”におかれている．・・・健康状態をみれば，ほとんどの老人が何らかのかたちで健康を害しており，・・・通院はバスがないので片道2070円のタクシーを使っている」．さらに「山村の老人は・・・意外に相互交流に乏しく，テレビを相手に孤独な日々を送っている」（大野，2005: 96-97）．このように交流の乏しい老人の暮らしを，大野は「タコツボ」的生活と呼んでいる．大野の限界集落論はこのように非常に厳しい状況を描くのである．

このような状況から，限界集落化のプロセスが進む．すなわち，第1に人口，戸数が激減し集落が縮小，第2に後継ぎ確保世帯の流出と老人独居世帯の滞留，第3に社会的共同生活の機能の低下，交流の乏しい暮らし（「タコツボ」的生活）への転化，第4に集落の社会生活の限界化，というプロセスがそれである（大野，2005: 99）．

ここに限界集落が立ち現れる．限界集落とは「65歳以上の高齢者が集落人口の50％を超え，独居老人世帯が増加し，このため集落活動の機能が低下し，社会的共同生活の維持が困難な状態にある集落」（大野，2005: 22-23）である．

ただし，限界集落化と過疎の概念をあまり対立的に峻別するのは，生産的ではない．安達生恒

によれば，過疎化のプロセスは次のようである（安達，1981: 93）．1．中味（人口，戸数）が減る 2．入れ物（集落）の維持が困難になる　3．入れ物が縮小する　4．入れ物が縮小して，中味が入りきれなくなる　5．それで中味が減る　6．この悪循環で入れ物がなくなってしまう．このように過疎化は限界集落論と同じプロセスを考えているのである．

8．限界集落論の概念と調査

限界集落論はインパクトが大きく，それをマスコミ等が取りあげて，一般でもお馴染みの議論になっている．このようになってくると，やはり，あまり厳密といえない使い方も出てきて，この点は，正しておく必要がある．

まず，限界集落の定義に含まれる，「65歳以上の高齢者が集落人口の50％を超え」という量的規定（7節の定義の引用，下線部）が一人歩きしている．65歳以上人口が50％を超えると，集落機能が低下して，社会的共同生活が困難になるというのは，機械的に結びつけるのは非常に危険である．この数字は「高知の山村ではこれくらいが限界集落が現れる大体の目安になるのじゃあるまいか」というくらいの大まかな基準と解すべきである．したがって，日本の過疎地域に一律にこの基準が適用できると考えるのはまったく不適切である．

高知の山村に限っても，「65歳以上の高齢者が集落人口の50％を超えると，集落活動の機能が低下し，社会的共同生活の維持が困難な状態になる」という因果関係は，厳密には実証されていない．そもそも，このような因果関係を社会調査によって確定するのは，非常に難しいのである．

また，過疎の概念を破棄するのも好ましくない．大野は「より事態が深刻化しているにも関わらず過疎という言葉ですませていいのだろうか，という疑問をもっている」ので，過疎という言葉は使わないと主張する．しかし，前節にみたように，限界集落化と過疎化のプロセスはほとんど同じなのである．つまり，両者の問題意識は非常に近い．であれば，限界集落の量的規定はカットして，過疎集落の中でも過疎が非常に深刻な集落を限界集落と呼ぶこともあるというくらいの緩やかな使い方が，現実的であろう．

限界集落論の現状分析には，いくつかの反論も出されてきた．また，それと密接に関係して，限界集落論の社会調査の項目にも異論が出ている．限界集落論の調査項目は，K集落調査ならば，表1の世帯構成，土地所有（農地，山林），就労・生活状態，健康状態，備考の各項目である．就労・生活状態とは，主には生活の経済基盤が調査されている．他の集落調査の項目なども参照してほしいが（大野，2005: 72-73），大野の限界集落の調査は大枠，このような項目が通常なのである．ここから，限界集落論の社会調査は社会学にしては，社会学的な調査項目があまりないことに気づく．

9．限界集落論の背後仮説

社会学の立場では，「集団や社会関係」への人々（個人）の参与（の束，総体）が「生活」である（山本，2019c: 3-7）．限界集落論を批判した木下や徳野の調査では，集団や社会関係が重要な調査項目としてでてくる．木下（2003）の「家族ネットワーク」の調査や徳野（2015）のT型集落点検，他出子調査などがそれである．同じく，限界集落論を批判した，山本・ミセルカ（2019）の調査では住民意識や人口還流（Uターン）が重要な問題として取り上げられている．これに対して，限界集落論では住民意識の問題もほとんど触れられていない．つまり，限界集落論は「生活」と「生活意識」（住民意識）をほとんど見ない[(5)]．これは，社会学の地域調査としては異例である．何故，

表1　K地区調査結果一覧（1990年）

調査世帯番号	世帯構成				土地所有状況		就労・生活状態	健康状態	備　考
	続柄	性別	年齢	員数	農　地	山　林			
1	世帯主 妻	男 女	82 84	2	畑 20a，13筆 自給野菜，こんにゃく，楮	4ha （30年生の杉）	2人の老齢年金70万円ほどで生活。仕送りなし。	世帯主は心臓病で現在高知市の病院へ入院中。妻は腰痛で月1回通院。	前老人会長。
2	世帯主 妻	男 女	75 71	2	畑 15a，8筆 自給野菜	2ha （25年生の杉）	2人の老給年金70万円で生活。仕送りなし。	世帯主は神経痛で毎週，妻は甲状腺の病気で月1回地元病院へ。	老人会長。
3	世帯主 妻	男 女	69 61	2	畑 15a，15筆 自給野菜，ゼンマイ，こんにゃく	0.4ha （杉と雑木）	営林署に勤めていたので，その恩給年150万円で生活。	世帯主は酒量多く，体調くずし通院。妻は健康だが難聴。	
4	世帯主 妻	男 女	70 65	2	畑 9a，5筆 自給野菜	3ヘクタール （20年生の杉と雑木）	営林署の恩給150万円と妻の障害年金年70万円で生活。	世帯主は血行が悪く月に1回高知市の病院へ通院。妻は全盲の障害者。	
5	世帯主 妻	男 女	60 55	2	な　し	な　し	集落の区長手当および役場の区長補助で50万円。	世帯主は長崎被ばく者で現在糖尿病で月1回通院。	区長兼神社長。
6	世帯主 後継ぎ	女 男	69 38	2	畑 7a，3筆 自給野菜，とうもろこし，楮	2ha （30年生の杉）	老齢年金28万円。後継ぎは奈良県の吉野に林業労働の出稼ぎ。	世帯主は健康で悪いところなし。後継ぎはまだ振動病の症状なし。	
7	世帯主	女	84	1	畑 22.7a，11筆 耕作放棄	1ha （25年生の杉）	息子の戦死による遺族年金150万円で生活。	高齢で現在地元の病院へ入院中。	後継ぎ（60）は5年前から振動病の認定患者で通院の都合で他出。
8	世帯主	女	79	1	畑 53.6a，28筆 自給野菜，荒らしづくり	3ha （主に25年生の檜）	老齢年金年36万円。仕送りなし，月4万円で生活できる。	ヒザが悪く6年前から月1～2回地元の病院へ通院。	
9	世帯主	女	78	1	畑 3.2a，2筆 自給野菜	2ha （杉）	老齢年金36万円と子供の仕送りで生活。	足腰が痛く，月1回地元の病院へ通院。	
10	世帯主	女	78	1	な　し	な　し	夫戦死しその遺族年金90万円。世帯主営林署の恩給年150万円。	白内障，脊椎を痛め，月2回地元の病院へ通院。	世帯主は戦後女性ながら営林署のトロッコの保線作業に従事し，停年退職。
11	世帯主	男	70	1	な　し	な　し	妻が土木建設の作業中事故で死亡。その補償金で生活。	足の骨が痛く週1回地元の病院へ通院。	借家，3年前まで生活保護を受給していた。子供が精神病院へ長期入院。
12	世帯主	女	60	1	畑 12a，5筆 自給野菜	3ha （10年間の杉）	土木建設の日雇。	元気で特に悪いところなし。	
13	世帯主	女	60	1	畑 9a，3筆 自給野菜	1ha （20年生の杉）	夫が戦死，遺族年金が年140万円。	内臓が悪く月2回地元の病院へ通院。	
14	世帯主	女	60	1	な　し	な　し	生活保護。	気管支喘息と心臓病で月2～3回通院。	
15	世帯主	女	55	1	な　し	1ha （16年生の杉）	病院のつきそい婦。	健康で病気なし。	
16	世帯主	男	55	1	な　し	な　し	炭焼きと日雇い仕事で生活。		独身。軽度の脳障害。
17	世帯主	男	51	1	畑 6.6a，4筆 荒らしづくり	な　し	昨年まで生活保護をうけていた。現在日雇で生活。	気管支喘息で毎月1回病院へ行く。	全盲の父を長い間世話をしてきて，昨年父が死亡，独身。
18	世帯主	男	47	1	畑 3a， 荒らしづくり	0.5ha （20年生の杉）	15年間林業労働者として出稼ぎ。現在京都の北山で仕事中。	振動病の症状を周囲のものに訴えており，潜在患者と思われる。	実弟（45）は現在振動病の認定患者で，通院の都合で他出している。独身。
19	世帯主	男	46	1	な　し	な　し	雑役の日雇取り。	アルコール中毒だったが現在健康を回復。	3年前まで母の世話をしてきて，母死亡後単身世帯となる。独身。

出典：大野（2005: 94-95）より．

限界集落論はそのようになるのだろうか？

その答え（ないし仮説）は，6節の図1の基本枠組みに求められる．この図では，限界集落化の淵源は，アメリカと同盟関係（日米安保条約）にある戦後日本資本主義の展開にあるとされる．ここにみられるのは，マルクス主義的な図式である．また，大野（2005）は資本主義という言葉を頻繁に使っているのも特徴である．そもそも，限界集落論は「現代山村」の問題であり，「現代山村」という概念は戦後資本主義の商品経済が浸透した山村と定義されているのは，6節にみたとおりである．このように資本主義という概念が頻出するのが，限界集落論の特徴である．資本主義という概念は社会学で使うことはある．ただし，「長い間それは，マルクス主義に近い層の外ではほとんど用いられなかった」（コッカ，2018: i-iii）というのも事実である．

つまり，限界集落論の背後仮説にはマルクス主義がある．背後仮説とは，明示された仮説や知見の背後にあって，明示された仮説や知見を導く理論や観念というほどの意味である．明示された仮説や知見とは，限界集落論ならば，「現代山村は集落間格差が拡大するなか，限界集落さらには，消滅集落への流れが着実に進行しつつある」（大野，2005: 23）といったような仮説ないし知見がそれである．背後仮説は「理論づくりの作業の〈影の協力者〉であり，・・・理論の定式化とその結果生まれる研究とに，終始影響を及ぼす」（グールドナー，1974: 36）．このマルクス主義の背後仮説の故に，土地所有（農地，山林），就労・生活状態[(6)]，健康状態が重視されたのである（と推測できる）．

10．限界集落論への異論

○集落解体の要因

前節によれば，限界集落化の淵源は，アメリカと同盟関係（日米安保条約）にある戦後日本資本主義の展開にあるというのが，限界集落の基本認識であった．しかし，農村集落の解体は，それよりずっと前に始まっている．これについて，山本陽三（1981: 180-185）は次のように考える．ムラは，江戸時代には農民支配の最末端機構だったが，農民の生産と生活の自治の砦でもあった．これが，明治22年の町村制施行，戦後の農村民主化運動，昭和の市町村合併，高度経済成長（生活様式の都市化，社会移動の増大・・など）という各契機で，解体に向かう．ここに示されるのは，近代化にともなう，ムラの解体である．限界集落論の考える，解体の淵源（図1，参照）は，高度経済成長の重要なパーツではあるが，それ以上ではない．

さらに，高度経済成長の末期で，過疎化が大きな問題になっていた頃の熊本県の農山村（矢部町）の調査（1976年実査）から，山本（1981: 1-167）は「ムラは生きている」と主張する．矢部では「部落の組織はきちんとしており，共有財産をもち，共同作業がいまなおきちっと行われている．また年中行事も多く，祭りも盛ん」だというのである．

○修正拡大集落と批判

それでは，山本の「ムラは生きている」という主張は，今でも有効だろうか？この問題に徳野は修正拡大集落という地域モデルで答えようとする．現代では人びとの暮らしは，かつてのように集落で完結しているわけでなく，近隣に他出している人びととの互助やつき合いでできている．それを加えれば，集落住民の生活の範域（つまり，修正拡大集落）では，紡錘型の人口ピラミッドに近くなり，そこに農村的生活様式（ムラ）はなお生きているというのである（図2）．たしかにここには，就業，農業，買物，医療，教育，娯楽などの互助があり，集落の会合や祭り，運動会などもここでの関係が大いに役にたっている．

○集落機能の残存と住民の意識

さらには山村の限界集落といえども，「悪質商法を地域で撃退する」生活防衛の機能をまだ残している．「私たちは二重三重の人間関係で守っている．まちの人は大丈夫なんだろうか」と資料1の集落の町

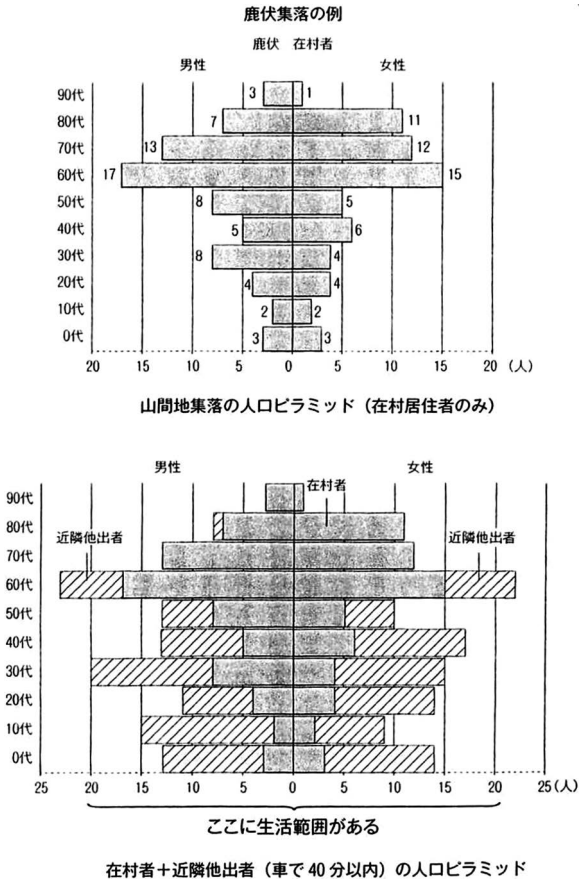

図2　山間集落在村者＋近隣他出者（車で40分以内）の人口ピラミッド

出典：徳野（2015: 31）より．

資料1　山村限界集落の集落機能（朝日新聞　2012年6月23日）

週刊 お年寄り
安心・見守り編

悪質商法 地域で撃退

お年寄りをねらった悪質商法が後を絶ちません。なぜだまされてしまうのでしょう。どうすれば相手にせずにすむのでしょう。悪質商法の撃退に取り組む広島市の集落を例に、人と人のつながりで被害を抑える方法を考えました。

訪問販売は皆でお断り

集落の看板 抑止力に

白井さんが提案して町内会でつくった看板。集落のあちこちに立っている＝広島市佐伯区湯来町多田

「この地区での訪問販売は皆でお断りしています」「一人暮らしの老人を皆で見守っています」

広島市佐伯区湯来町の上多田集落には、そんな看板が道路脇のあちこちに立つ。集落にひとつある町内会の会長の一人、白井義和さん(78)によると、2年ほど前、それぞれの町内会が費用を出し合って計14枚作った。

「訪問販売をなんとか食い止めたい」と、白井さんがほかの町内会長に呼びかけたのがきっかけだ。

山と川に挟まれた斜面に家が並ぶ集落は77世帯130人。うち3分の2が65歳以上。かつて悪質商法の被害が出たことがある。

数年前、ある業者が布団の販売会を開いた。一軒一軒で借りた座敷が「会場」だった。「金だらいを無料であげる」と人を集めた。

うわさを聞いて集まった住民に「金だらいが欲しい人」と尋ね、手を挙げさせる。場が盛り上がったところで、今度は高額の布団セットを持ち出してきて「欲しい人」と聞く。

雰囲気にのまれて手を挙げると大変だ。値段を聞いておじけづいたお年寄りに「さっき欲しいと言ったじゃないか」とやりこめる。引けなくなったお年寄りが契約――という手口だ。

布団を買わされた男性は、一定期間なら契約を解除できるクーリングオフを周りが勧めても「男だから」と返すのはみっともない」と断ったという。

シロアリ駆除に限服、リンゴ販売……。集落にはいろんな業者が入ってくる。

「秘勧スーパー以外の訪問販売は、安くても買わんでおこう」と住民の間で申し合わせている。

「看板のお陰で断る理由が相手にも見えて、抑止力になってます」と白井さん。一方で、こうも思う。

「私たちは二重三重の人間関係で守っている。まちの人は大丈夫なんだろうか」

資料1　「悪質商法を地域で撃退する」
出典：朝日新聞より.

内会長は述べている（山本，2017: 202所収，資料1）．山本（2017: 186-209）はこの集落の高齢者の生きがい意識を調査しているが，生きがい意識は決して低くない．

また，過疎山村（大分県中津江村）の2016年実施の地域意識調査では，「この地域は生活の場としてよくなる」という人は4.2%しかいない．しかしそれでも，ほとんどの人は「この地域に住み続けたい」（82.1%），「この地域が好きだ」（82.4%）と思っている．さらに，この厳しい山村でも，Uターンが21.3%，結婚で転入が22.7%，仕事で転入が6.7%いて，住人の半数は流入人口である（山本・ミセルカ，2019）．過疎の村にも，村を支える意識と人口の流れがある．

○「高齢者減少」型過疎

本節の知見は限界集落といえども，まだ残る生活の基盤を示している．このことへの着目は地域社会学の非常に重要な課題である．ただし，2005年ころから過疎の進んだ地域で出てきた高齢者人口の減少（「高齢者減少」型過疎）と，それにともなう地域人口の全年齢層での後退（「消える村」）は，過疎の新たな難問である（山本，2017: 22-39；山本・高野，2013）．村に高齢者（老親）が住むが故に，他出した子どもとのつきあいで修正拡大集落が形成可能なのである．また，村に住む老親への「気がかり」がUターンの大きな動機のひとつになっている（山本，ミセルカ，2019）．村の老親は村の有力な存立基盤なのである．

11．おわりに

鈴木榮太郎の都市社会学に聚落社会という概念がある．聚落社会は「共同防衛の機能と生活協力の機能を有するために，あらゆる社会文化の母体となってきたところの地域社会的統一であって，村落と都市の2種類が含まれている」（鈴木，1969: 80）．ここに示された，共同防衛，生活協力，社会文化の母体という聚落社会の3機能は，現代の巨大システム（都市的生活様式を可能にする，専門機関，つまり，商業サービス，行政サービス）に取り囲まれた暮らしが圧倒的になればなるほど，人々の暮らしに必要である．それを問うのが地域社会学なのである．巨大システムの例としてネットでの買物を考えてみればよい．そこには，「口コミ」とか「カスタマーレビュー」などがついていて，人々に「安心」を与えている．これも聚落社会（≒コミュニティ）の「共同防衛」の実例である[(7)]．

上の古い鈴木榮太郎の見解と瓜二つの見解は，現代アメリカの経済学者，R.ラジャンにもある．「ワンクリックで地球の裏側の人たちと連絡がとれる時代に，なぜ隣人が重要なのか．十全に機能している国家と活発な市場のある先進国で今日，近隣コミュニティが果たす役割とは何だろうか．初期にコミュニティが果たしていた機能の多くを国家と市場が引き受けるようになったとはいえ，近隣コミュニティはまだ重要な機能を担っている．コミュニティは私たちのアイデンティティの一部だ．コミュニティは私たちに力を持っているという感覚を与えてくれる．グローバルな力を前にしても，自分たちの未来を作っていけるという感覚だ．また，他の誰も助けてくれない境遇にある時，救いの手をさしのべてくれる」（ラジャン，2021: 3）．「・・・・他にも利点がある．地域コミュニティ政府は連邦政府の政策に対して防波堤の役割を果たす．すなわち多数派の専横から少数派を守り，連邦政府の抑止力になるのだ」（ラジャン，2021: xvii）．都市的／農村的生活様式論（地域社会学）の課題は，今日でもまったく古びていないのである．

謝辞

本論文は19H01562（高野和良九州大学教授　代表）の科研費の補助を受けている．

注釈

(1) この引用の文言はGeorge Duhamelというフランス人の批評とのことで，奥井（1940: 76）に紹介がある．

(2)「雑異性」と「異質性」はともに，ソローキンのheterogeneityの訳語である．奥井がソローキンのheterogeneityを「雑異性」と訳したのは，奥井（1940: 78-79）で確認できる．異質性という訳語が定着しているので，こちらの訳語を使うが，雑異性という訳語はシカゴ派都市社会学の雰囲気を伝えるいい訳語である．

(3) 奥井の引用では旧字などを多少，改めた．以下同様．

(4) きだ（1981）には「個人的に対処，善処（個人的な裁量）」の例が全編に溢れていて，まことに興味深い．本書で紹介したのは，まああどけないような話だが，そのような話ばかりではない．たとえば，きだ（1981: 170-171頁）の「53　部落の英雄たちは始めて一つの異論なしに一致すること，そして一致が後ろめたきものであることを発見すること」などの節を読むといいいだろう．

(5) 大野（2005: 139-150）には，「山村住民の意向調査」がある．これは仁淀村の60集落の区長（回答者53人）への意識調査であり，充分な調査とはいえない．

（6）就労・生活状態とは，主には生活の経済基盤が調査されている．

（7）この例は，筆者と共同で開講した熊本大学大学院ゼミでの，環境社会学者・牧野厚史氏（熊本大教授）の発言に負う．

参考文献

安達生恒（1981）「過疎とは何か―その概念と問題構造（1968年時点で）」『過疎地再生の道』日本経済評論社，79-100.

Bloodworth, J. (2028) *Hired-Six Months Undercover in Low-Wage Britain*, Atlantic Books,（濱野大道訳，2019，『アマゾンの倉庫で絶望し，ウーバーの車で発狂した―潜入・最低賃金労働の現場―』光文社）.

Ehrenreich, B. (2001) *Nickel and Dimed*, Metropolitan Books,（曽田和子訳，2006，『ニッケル・アンド・ダイムド』東洋経済新報社）.

Gouldner, A.W. (1970) *The Coming Crisis of Western Sociology*, Basic Books,（岡田直之・田中義久訳，1974，『社会学の再生を求めて1―社会学＝その矛盾と下部構造―』新曜社.

本間龍（2013）『原発広告』亜紀書房.

本間龍（2016）『原発プロパガンダ』岩波新書.

木下謙治（2003）「高齢者と家族―九州と山口の調査から―」『西日本社会学会年報』創刊号，3-14頁.

きだみのる（1981）『気違い部落周游紀行』富山房百科文庫.

Kocka, J. (2017) *Geschichte des Kapitalismus*, Verlag C.H. Beck oHG.（山井敏章訳，2018，『資本主義の歴史―起源・拡大・現在―』人文書院）.

倉沢進（1976）「生活の都市化とコミュニティ」『都市問題研究』第28巻第2号，40-52頁.

倉沢進（1987）「都市的生活様式論」鈴木広・倉沢進・秋元律郎編『都市化の社会学理論―シカゴ学派からの展開―』ミネルヴァ書房，293-308頁.

倉田和四生（1978）「都市的生活様式の特質」『関西学院大学社会学部紀要』36号，19-31頁.

奥井復太郎（1940）『現代大都市論』有斐閣.

大野晃（2005）『山村環境社会学序説―現代山村の限界集落化と流域共同管理』農山漁村文化協会.

Rajan, R. (2019) *The Third Pillar-How Markets and the State Leave the Community Behind*, Penguin Press.（月谷真紀訳，2019，『第三の支柱―コミュニティ再生の経済学―』みすず書房）.

総務省（2021）『令和元年度版　過疎対策の現況』.

Sorokin, P. and C.C. Zimmerman (1929) *Principles of Rural-Urban Sociology*, Henry Holt and Company.（京野正樹訳，1940，『都市と農村』厳南堂書店）.

鈴木栄太郎（1969）『都市社会学原理（鈴木栄太郎著作集VI）』未来社.

徳野貞雄（2015）「人口減少時代の地域社会モデルの構築を目指して―「地方創生」への疑念―」徳野貞雄監修『暮らしの視点からの地方再生―地域と生活の社会学―』九州大学出版会，1-36頁.

山本努（2017）『人口還流（Uターン）と過疎農山村の社会学（増補版）』学文社.

山本努（2019a）「付論　若者（大学生）の原子力発電についての意識」山本努・福本純子編『地方地域社会に暮らす若者の社会意識―「九州・山口在住の若者」に関する社会調査から―』熊本大学大学院人文社会科学研究部（地域社会学研究室），80-82頁.

山本努（2019b）「地域社会学入門/過疎農山村研究から」同編『地域社会学入門―現代的課題との関わりで―』学文社，39-88.

山本努（2019c）「地域社会学入門/都市研究から」同編『地域社会学入門―現代的課題との関わりで―』学文社，1-38.

山本努・福本純子（2022，近刊）「福島原発事故後の大学生の原子力発電についての意識」山本努編『よくわかる地域社会学』ミネルヴァ書房，所収.

山本努・ミセルカ　アントニア（2019）「過疎農山村生活選択論への接近―大分県中津江村の人口還流と地域意識の調査からの例解―」山本努編『地域社会学入門―現代的課題との関わりで―』学文社，89-118頁.

山本努・高野和良（2013）「過疎の新しい段階と地域生活構造の変容―市町村合併前後の大分県中津江村調査から」『年報　村落社会研究』49号，81-114頁.

山本陽三（1981）『農村集落の構造分析』御茶の水書房.